



世田谷特攻観音 六角堂の雪

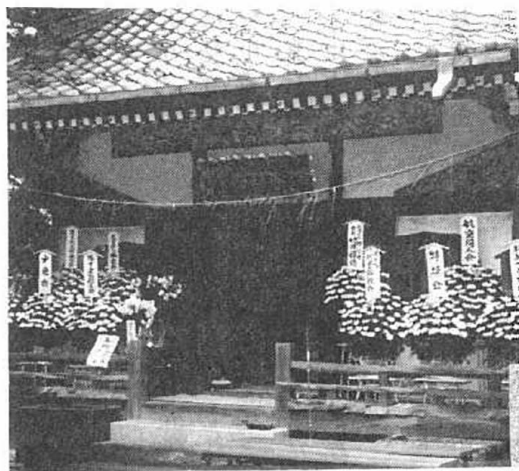
特攻

第 9 号

〒102 (新)
東京都千代田区九段南
4-3-7 (財) 偕行社内
特攻隊慰霊顕彰会
特攻平和観音奉賛会
電話 03 (263) 0851

編集人
発行人

最上貞雄



平成元年 年次法要 世田谷観音



平成元年 9 月 23 日秋分の日に世田谷観音に於て第 38 回特攻平和観音年次法要が厳修された。ご遺族来賓を始め四〇〇名に及ぶ方々が参拝された。

浅草寺貫主守山良順大僧正以下式衆の読経に続いて、竹田恒徳会長の祭文遺族代表草野みよ子様並びに戦友代表水野帝様の追悼の辞が捧げられ深い感銘を受けた。

来賓として駐日トルコ大使館付武官海軍大佐ジェンギス・アルポズ殿の特攻を称える力強いご挨拶があった。

(本紙 4 頁に挨拶の概略を掲載)

又今年始めて海軍軍装会の方々が軍艦旗を先頭に軍服に威儀を正し参拝され一同の注目を集めた。(副理事長最上貞雄)



特攻平和観音経

恭しく伏して惟んみるに、天地開闢以来、この世に生を享けしもの、幾十百千万億兆なるを知らず。

その間、同種相集い、同族相結んで国をなし、互に境を劃し、相互反目反噬してその国土の拡張を図り争奪して止まざること百千万劫なり。

就中、中世以降、西欧の諸列強は、善良盲昧の後進諸国を併呑し、もろもろの種族を圧伏して殖民の苦を与え、その野望の楽を取りぬ。世界の旧秩序即わち是れなり。

我が邦は、古来平和を以て八紘為宇の大理想となし、万邦融合の大理念を掲ぐることに、ここに三千年、昭和の聖代に至り、世界に一大新秩序を齎らさんことを庶幾し遂に曠古の大戦となる。

一億同心。打ちてし止まんの豪氣蕩々、挙国戦務を努むるも、奈何せん、彼我の戦力隔絶し、戦勢日に非にして、大事將に去らんとす。

茲に忠勇無双の紅顔の烈士、

自奮自励、九死に一生を期せず、特攻以て敵機、敵艦船を求めてこれを屠り、敵陣營の勝を奪う。

その挙の壮烈にして、その果の偉大なる、全世界の瞠目するところなりき。然りといえども、遂に惨絶の敗戦に会す。我が邦無前の苦難、あやなんぬる哉。

特攻烈士の挺身殉国の哀情を忖度すれば、人皆言辞を嚙み、熱淚胸宇に充つ。

それ人身は享け難く、その生を終るや難し。

前漢の大史公司馬遷にこれを聞く「人固より一死あり。死或は泰山よりも重く、或は鴻毛よりも輕し。これを用うるに趣くところ異なるなり」と。

特攻勇士の諸靈は正に忠烈の龜鑑なり。諸靈が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に想到せんか誰れか万斛の涙なきを得んや。

老いも若きも泣き

男も女も哭き

草も木も、馬も羊も涙せん

玉も磚も悉く悲しまん

天地万象凡て働きて

止まざらん

唯、諸靈を慰め得るもの一つあり。宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。

真に世紀の偉業。この赫然たるに匹俦するもの果して他にあらんや。

これ正に諸靈の志の顯現なり。諸靈の血の発露なり。諸靈や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の靈徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。

諸士の威神や無極なり。

その威徳は日月と耀を争い、その勲績は末代永世に亘りて宇内に広宣流布せられんこと豈疑を容るるの餘地あらんや。

嗚呼尊い哉 嗚呼仰がん哉

長存不滅の光

南無特攻平和観世音菩薩

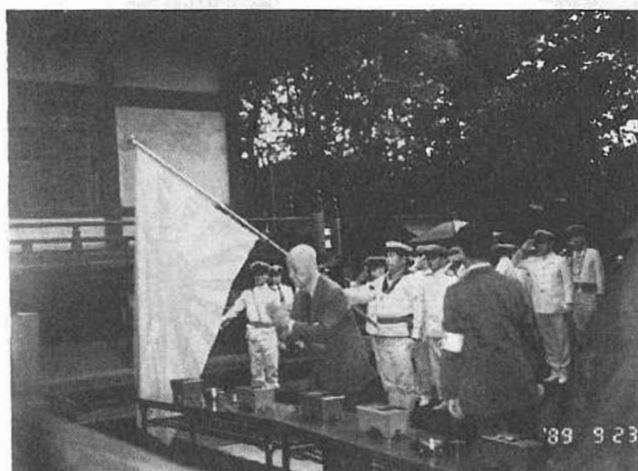
南無特攻平和観世音菩薩

南無特攻平和観世音菩薩

東京都世田谷区下馬四丁目九番四号

世田谷山 観音寺

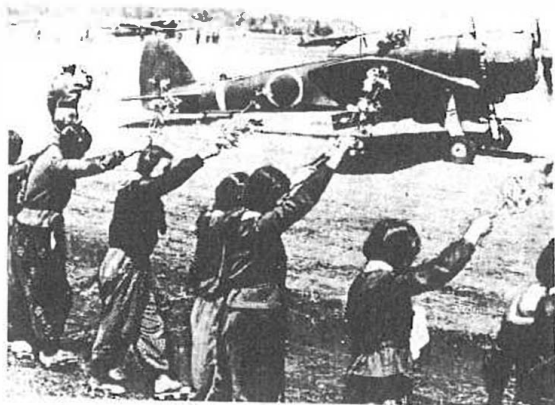
電話 〇三(四一〇)八八一番



見落とされている特攻隊の偉功

特攻で斃れた勇士鎮魂

妹尾 作太男



日本が戦後四十余年にして、世界第二の経済大国としてカムバックすることができる基を開いたのは、昭和二十年八月のポツダム宣言受諾であった。

このポツダム宣言は一般には無条件降伏要求宣言であったと信じられているが、決してそうではない。ポツダム宣言は一二項目からなっており、その第一項から第四項までは、この宣言が

出されるに至った経緯について述べ、第五項では終戦を実現するための条件について、「吾等ノ条件ハ左ノ如シ」として、以下六項から第十三項まで、その条件をあげている。

したがって、日本がポツダム宣言で受諾したものは「有条件降伏」であって、占領軍側が宣伝したように国家（政府）として無条件降伏したわけではなかった（ただし各地の日本部隊は無条件降伏をした）。

これについて、佐藤和男教授（青山学院大学）は次のように述べている。「連合国最高司令官マッカーサーは、例えば、『日本は、法的には無条件降伏をしていない』と議会で答弁した当時の外務省条約局長・萩原徹氏の言葉に激怒し、氏を左遷させた。日本国民にとって不幸だったのは、横田喜三郎東大教授など一部の論者の『日本・無条件降伏説』のみがマスコミで流布することを許され、学問的に正しい有条件降伏論

が、占領軍の実施した『検閲』によって、公表を厳禁されたことであつた」（『世界日報』平成元年三月十八日付）

ドイツは昭和二十年五月すでに降伏して、日本は孤立無援で戦争を続けていた。ヤルタ協定によってソ連の対日参戦が目前に迫っていた同年七月の時点で、なぜ米・中・英の三国が共同で、戦争終結のため「有条件降伏」のポツダム宣言を出したのであるうか。

沖縄攻略作戦がほぼ終了した段階で、米軍は日本本土上陸作戦計画を作成した。その実施は南九州攻略のオリピック作戦が十一月一日に、また関東上陸のコロネット作戦が翌年三月一日に、それぞれに実施することに予定されていた。

これらの作戦が実施された場合の経過については、オーストラリアの戦史家デニス・ウォーナー夫妻との共著『ドキュメント 神風』（時事通信社刊 および徳間書店文庫版）の中で、日米両軍の作戦計画を中心に、沖縄攻略作戦での損害率を基礎として、米軍の九州上陸作戦の死傷者は簡単に控え目に見積っても、一三万名を上まわるだろうと述べておいた。

しかし一説によると、これらの作戦が実施された場合、米軍上陸部隊に対

する、日本軍の猛烈をきわめると予想される特攻攻撃による損害は、とてもわれわれの試算したそれではなくて、米軍では百万以上の損害を見込んでいたのではなからうかと想像される。なぜなら、広島に対する原爆投下が米兵百万の死傷を救うことになっただろうという、トルーマン大統領の証言が思い出されるからである。

してみると、あの孤立無援の、まさに刀折れ矢尽きかけた日本に対して、勢いに乗る連合軍をして八項目からなる「有条件降伏」のポツダム宣言を行わしめたものは、特攻隊がそれまでに連合軍に対してあげていた、精神的、物質的の、恐るべき戦果であつたように思われてくる。

筆者はこの点にフト思いついたので、前掲書の下巻巻末付録に詳細な特別攻撃戦果一覧表を、連合軍側の戦闘記録から作成添付しておいた。これはまた、特攻攻撃に斃れた敵味方双方の勇士への鎮魂の紙碑でもある。

神代以来の恵まれた、豊かな生活を楽しんでいる現代の若者を見るにつけても、この繁栄の基を開くために散つていった、四十数年前の特攻隊員たちのことが偲ばれてならない。（本人は、日・米・英・豪戦史に基づき特攻研究の権威者）

トルコでは遺族や親族は

戦没者の愛国的行為を誇りとしている

第38回特攻平和観音年次法要
(元・9・23)における駐日ト

ルコ大使館付武官ジエンギズ
・アルボズ海軍大佐のスピー
チ(要旨)

特攻という偉大な行為のため、祖国
に身を捧げられた英霊を供養する、
このような意義深い行事に参列できま
すことは、外国人の私にとりまして身
に余る光栄であります。

特攻隊員は、再び生還する可能性の
ない任務を敢然として遂行し、祖国に
殉じられたのであります。このりっぱ
な功績に対し、私は同じ軍人として、
心からなる尊敬を捧げる者でありま
す。

私は回教徒であります。回教では、
祖国に身を捧げて散華した、いわゆ
る戦没者は、そのまま天国、すなわち
神の国に行く信じられております。
したがって、その遺族や親族は、その
戦没者の愛国的行為を常に誇りにして
おります。私は、本日ここにお集まり
のご遺族ご友人の皆さんも、この点に

ついてはご同様であろうと信じて疑い
ません。

私どもの国トルコでは、日本人は、
誇り高く献身的であり、勤勉で愛国的
な国民であるということがよく知られ
ております。そして、われわれトルコ
人もまた、このような特性を持った民
族なのであります。この日本人とトル
コ人の共通性が、これまで永く両国が
親密な国際関係が続けてきたゆえんで
あります。

トルコでは、今でも東郷提督と乃木
将軍が有名であります。殊に乃木将軍
は、明治三十七八年の日露戦争におい
て、ご令息二人を含む二万名を越すぎ
せいを冒して旅順を攻略されました。
その際の決死隊の敢闘精神は、先の大
戦における特攻隊に引き継がれたもの
と信じ、トルコの人々は今でも、日本
人に対する敬愛の念を失ってはおりま
せん。

かつてオスマントルク帝国の末期、
われわれの祖国は敵の手によって占領
されましたが、現代でもアタチルク

(国民の父)とあがめられている、ケ
マルパシャという英雄に率いられた、
無名の愛国者たちの勇敢な戦いによっ
て、全土から敵を追い払い、トルコ共
和国を建設することができたのであり
ます。この勝利の一因として、日露戦
争における日本の決死隊の勇猛果敢な
働きに、トルコ人が勇気付けられたこ
とがあったものと私は信じておりま
す。

したがって、私は、祖国のために身
命を惜しまなかった人々に、最高最大
の感謝と敬意を捧げなければならな
いと思う者であります。

最後になりましたが、この行事にご
招待いただき、ごあいさつの機会まで
与えられましたことに、深く感謝申し
上げます。

ここに、特攻によって祖国を救うた
めに散華された英霊のご冥福を心から
お祈り申し上げます、私のつたない
ごあいさつを終る次第であります。

文責訳者・上坂 康(海兵75期)

『特攻隊員、
別れのピアノ演奏』

桜木靖雄

佐賀県鳥栖市の鳥栖小学校体育館に
今も古びたドイツ製のグランドピアノ
が一台眠っている。

塗装も落ちて最早正常に奏でること
もできないほどに歳をとったピアノで
ある。学校側ももう廃棄処分しかな
いと考えられたものである。

だが、このピアノには今から四十五
年前の忘れ難い思い出が秘められてい
てそれを知るものはこのピアノ自身と
当時この小学校の教諭であった上野歌
子さんだけである。

昭和二十年五月、戦局は日を追って
熾烈を極め沖繩に上陸した米軍は全島
に進攻し、連日これを撃滅すべく周辺
海域の敵艦船群に対して我が陸海軍の
特攻隊は必死の出撃を続けていた時で
ある。

その五月某日、ここ鳥栖小学校を突
然訪ねてきた童顔の二人の陸軍将校が
いた。

彼等は上野教諭に自ら名乗って、
「自分達は上野音楽学校(現東京芸
大)ピアノ科出身の学徒出身兵です、
明日特攻出撃することとなりました
が、学校を出て今日まで演奏会でピ



ノを弾く機会がありませんでした。

勿論、祖国の為に命を捧げることは本懐ですが、今生の思い出に思いきりピアノを弾いて二人だけの演奏会をやりたいのです、今日は目達原の基地（現在の佐賀県神埼郡三田川町）からあちらこちらとピアノを求めて歩いてやっとこの小学校にたどりつきました。どうぞお願いをいたします」。

上野教諭の胸中には灼きつく熱いものがこみあげてきた。

「どうぞ兵隊さん、時間のある限り弾いて下さい私もここで聴かせていただきます」。

静かな放課後の音楽教室には戦時下を一瞬忘れるような五月の爽やかな風と共に遠く校庭の彼方に緑に映える山々が見える、ただ校舎のガラス窓には空襲に備えて張りめぐらされた防護のための×印の白いテープと校庭の南端に立っている敵機来襲を告げる監視所のサイレンが何時なり出すかも知れない緊迫感を漂よはせていた。

背の高い方の少尉がピアノに向かって、ベートーベンのピアノソナタ「月光」を弾き始めた。

それはまさに戦時色の強いこの鳥栖の町に急に蘇った平和な音律の芸術であった。

それから、もう一人の少尉とともに

代るがはる素晴らしい演奏が約一時間も続いたろう、

どこから聞きつけたのか二十人程の学童達がいつの間にかこの教室に集まっていた、五、六年生の児童達である。上野教諭を中心にしてこの児童達の瞳はさながら天使のように美しく、全く表現のできないほど清らかな顔になって優しく少尉達を見つめていた。

やがて帰隊の時刻も迫ってきたとき、上野教諭は二人にむかって、

「有難うございました、こんな素晴らしいピアノを何年振りかで聴かせていただきました、この子供達もあなた方のお姿と一緒に永遠に今日のピアノ演奏を忘れることはないでしょう、明日は愈々ご出発とのことですが心からご武運を祈らせていただきます」。

お別れにこの子供達と『海行かば』を合唱させていただきます」。

教室一杯に静かに上野教諭、子供達の『海行かば』が流れた、送られる二人の少尉もいつか一緒に合唱していた。

「この戦争はいつかは終わります、しかし今自分達が死ななければ、この国を君たちに残すことはできません」と、児童達の頭をなでながら力強く語り、二人の少尉は満足の微笑をたたえながら凛々しい姿で去って行った。

翌日の午前、鳥栖小学校の上空に一

機の飛行機が現れ、二度、三度と翼を大きく振りながら南の空へ飛び去った。

あれから四十五年、ピアノはあの日を忘れてはいない、そして上野教諭も教職を去った今でもあのピアノの音律は忘れていない、しかし残念なことにあの日の二人の少尉の名前やその後の生死はわかっていない。

上野教諭は二年前、この脳裏に焼きついた事実を鳥栖市内の文芸雑誌に紹介した。

「もし許されるなら私が廃棄処分になる前に引取りたい」と考えた。

同小学校のPTA総会でもこの話を披露したところ期せずして父母の間でも保存の方向に動きが盛り上がり、市長からも文化会館で保存したいとの意向が申し込まれた。

感激した上野元教諭は「戦争がなかったら、こんなつらい思いはしなかった、そしてまたこんな尊い話も残らなかったでしょう、このピアノを見ただけの人々が平和の尊さを心に刻んで下さったら……」と静かに語った。

後日、この話は朝日新聞鳥栖通信局より新聞に紹介され大きな感銘と反響をよんだ、そして二人の上野音楽学校出身学徒兵の名前と戦歴について何とか調査したいとの意向で、特攻隊慰霊顕彰会宛てに正式に依頼が来ているが

現在（平成二年一月末）まだその確認はされていない。

もしお心あたりの方があればどんな情報でも結構ですから『特攻隊慰霊顕彰会』事務局宛 お願いを申し上げます。

台草

（筆者は特攻隊慰霊顕彰会々員）

特攻の精神

—美しくやがて悲しき—

山田輝彦

特攻とは何か

特攻―「トッコウ」て何だといふ問いが返って来さうである。あれから四十四年が経ったが、老残の身に、夭折した若者たちの面影は折りにふれて、昨日のやうに鮮烈に蘇って来る。大東亜戦争末期、レイテ島には圧倒的な物量の機動部隊が迫ってゐた。絶望的に劣勢な日本海軍が、一機以て一艦を屠る必死必殺の戦法、それが特別攻撃隊の編成だった。零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせて、搭乗員もろとも敵艦に体当たりする。古今の戦史にも前例を見ない戦法であった。昭和十九年十月二十五日、海兵七十期出身の関行男大尉を指揮官とする、五機編隊の神風（しんぷう）特別攻

撃隊が、最初の特攻作戦であった。タクロバン沖で敵機動部隊を捕捉した彼らは、一気に襲ひかかった。艦上の米兵たちの中には、轟音をあげてまっしぐらに突入して来る零戦に戦慄した。

あるものは甲板に突きささり、あるものは甲板をつき破って艦内に突入、魚雷や爆弾を誘爆させた。空母一撃沈、空母二、軽巡洋艦一撃破、これが僅か特攻機五機の成果であった。これ以後敗戦まで、二二六七機が出撃、二五三〇名(うち八割は海軍)が戦死している。

この特攻作戦の創始者は海軍中将大西滝治郎であった。終戦の翌日の未明、彼は軍令部次長官舎で割腹自殺した。五十五歳だった。自らの命令で、生還率ゼロ・パーセントの作戦行動に若者を赴かせた彼が、どんな苦悩に耐へたかは知る由もないが、彼は生前、「わが声は棺を覆うて定まらず、百千のち知己またなからん」と言っていたという。割腹し、頸動脈を切断しても、なかなか死ぬなかった。駆けつけた軍医を睨んで、あれだけ多くの若者を死に追いやったのだから、出来るだけ長く苦しんで死ぬのだといって、手当をゆるさなかった。新婚一カ月で、「俺は最愛のKA(家内)」を敵兵から守るため」といって死んだ関大尉もあはれなら、命じた側の大西の死も

涙を誘ふものがある。

それにしても「特攻」の定義は実にむづかしい。それは、制度的に計画、立案、遂行された、生還率ゼロ・パーセントの作戦行動とでもいふしかない。戦史の上で決死隊といふものはある。しかし、その際「死」は人間の主観の中に決意として存在するのである。例へば、日露戦争の旅順口閉塞隊にしても、生還のための万全の策は講じられてゐた。しかし、特攻はいはば必死隊である。目的の達成は「死」であり、行為は不可避の「死」に向つての進行なのである。大西がいつも自嘲的に「統率の外道^{げだう}」といっていたのも当然であろう。「勝機をつかむ」から「勝たぬまでも負けない」へ、やがて「万一敗けたとしても、特攻が出たことへの精神的意義において、国は滅びない」へと、大西の心情は戦局の推移と共に三転したと草柳大蔵氏は述べている。大艦巨砲主義に、終始反対だった大西が、その生涯の最後に、「特攻」を命ずる側に立たねばならなかったのは悲劇といふしかない。

一方、若い特攻隊員たちの心情を思うと涙を禁じ得ない。恐らく彼らは、必然の死を前にして、悩み、苦しみ、諦め、やがて死を運命として受け入れる心境に到達したのであろう。彼らは

可能な限りのさまざまな価値の糸を死と結びつけたに違いない。「悠久の大義に殉ずる」「美しき山河のために」から、関大尉のやうに「最愛のKAのために」まで、いろいろな振幅がある。彼らの行為を「軍国主義の犠牲」「軍国主義教育の狂信」というやうな論断で何が解明できよう。航空機を操縦して、目標に命中させるには、極限の意志と理性を必要としよう。狂気によって遂行できる任務ではない。彼らが必然の死を目前にして、両親や弟妹や妻たちに残した言葉の何と澄明にして、やさしさに充たされていることか。そして、彼らの「死」によってわれわれの「生」があるという事実を凝視すれば、頭を垂れて鎮魂の思いを新たにする外に、われわれに何が出来るのだろうか。天は恩寵深き者に長いのちを与へぬといふ。天意の死といふ考への出て来る所以だが、さうでも考へない限り、生き残った者の負い目は永久に癒やされないものである。

万世(よろずよ)に

祈る

松浦喜一

万世(ばんせい)の地に飛行機が建

設され、陸軍航空基地として活動を始めたのは、昭和二十年二月のことである。初めに飛行第六六戦隊(特操一期生苗村七郎氏が所属)の襲撃機隊が配属された。四月六日から振武隊による沖繩特攻が始まるのであるが、沖繩戦終了の六月二一日、最後の特攻として出撃、戦死されたのは我々の同期生薄井義夫君で、以後沖繩作戦はうちきられ、振武隊は本土決戦待機となった。

空から見た当時の万世飛行場は、東シナ海に展開する広大な砂丘である吹上浜に松林を挟んで接しており、離陸すればすぐ海、反対側に離陸した時は小高い丘に展開する高射砲陣地を下に見る——という、小さな飛行場であった。知覧飛行場を万世の方向に離陸するとすぐ目の前に山が迫り、峰を越えて降下姿勢に移ると、もう前方眼下に万世飛行場が展開し、そのまますべりこむことができる。知覧と万世は直線距離にして約二十キロしか離れていないが、知覧が山の中の飛行場であるのと対照的に、万世は東シナ海に向かって視界的には広々とした感じがあった。ここは現在加世田市となっているが、当時は加世田町と万世町に分かれており、飛行場周辺は万世町で、農家が点在するのみであり、我々の飛行機は林を求めて周辺に分散、格納した。

宿舎は加世田町にある当時は町随一の料亭旅館「飛竜荘」(現在は個人の住居となっている)で、特攻隊員は全員ここで起居を共にしたが、数日あるいは十数日宿泊した後、次々に還らぬ出撃の航路をたどって征った。町には家々が黒々と並ぶだけで店には品物がなく、わずかに写真館(現存する)があり、隊員はここで最後の写真を撮り郷里へ送るだけであった。

戦後、飛行場は畑になり、わずかに営門の柱が二本残り、その面影が当時を伝えている。畑は昭和六二年、吹上浜海公園となって、りっぱに生まれ変わった。万世特攻慰霊碑はその二本の柱と海浜公園との中間にあり、万世飛行場から出撃、戦死者は、振武隊一二九名(うち特操二期十六名)、第六六戦隊七一名、第五五戦隊六名、その他二名の計一九八名である。

毎年四月の第二日曜日に慰霊祭が執り行われるが、本年は四月九日(日)、ご遺族を中心に挙行された。戦没者のご両親はご老齢となられ、兄弟姉妹の方にご参列いただいている。

私は万世で約二か月、知覧で約一か月の生活を送り、終戦を迎えた。昨年四月、特操二期生七十数名が万世の慰霊祭に参列くださり、たいへん嬉しく、またありがたかった。ご承知の

ように、知覧には資料館でもあるりっぱな特攻平和会館が完成しており、訪れる人も多い。しかし万世が特攻基地であったことについてはよく知られておらず、鹿児島方面へお出での節は、万世の慰霊碑「よろずよに」へもお参りいただきたく、願う次第である。

富嶽隊員の遺稿集を

拝読して

伊東賢司

富嶽隊員の遺稿集をお貸しいただきありがとうございました。

四十五年も過ぎ去った、遠い昔の出来事が昨日の事のように浮かんて来ました。

涙なくして読めません、何度、涙を流し乍ら読んだことか、書かねばならぬ心境、書く心境、死の直前に、死んで行く者が、生きている者へ伝えるのはペンだけです、あの、暗いヤシ油のランプの下で、隊員が思い思いに親に兄弟に言い残す事を書く心境、誰一人、言葉もなく深く頭を垂れ乍ら、遺言を書くのです。

遺稿集の中にもありましたが、夜とか二十時三十分とか、暗いランプ

の下でとか、夜が多く書かれています。が、これは、夕方、軍司令部から明朝とか明払曉に体当り(出撃)するよう命令が来るため、それから隊長が明朝の出撃は何機で一番機には誰、誰、二番機には誰、誰と、その時の出撃可能機数或いは隊員の健康状態、敵艦の状況等を考え乍ら決定するのです。したがって出撃する隊員の名前は三十分から一時間位は遅れます、当然夜になりますので、最後の遺言は夜中に書く事になります、勿論ベットに入ってもねむれるわけはありません。明日死ぬ者、残る者はその時、決まるわけでありますが、明日は出撃しなくとも明日は俺の番だとなるのです。

私も何回も何回も出撃しましたが敵艦を発見出来ず、或いは敵機と交戦、体当り出来ず、帰還しました。したがって、この遺稿集には、ありませんが一諸に親に兄弟に恩師に、出撃の都度書きなしたものです。

だから、この遺稿を読んで、当時の状況が、まのあたりに浮かんて来ます。死んで行く者の心境それは私には、痛い程よく理解出来ます。

健康な若者がお国のためとは言いつつ、喜んで死んで行けるでしょうか、死なねばならなかった、特攻隊員、戦死された隊員を思う時、心からご冥福

を祈らざるを得ません。

もう一つお知らせしておきますが、たとえば、明朝三時出撃という事になりますと、前にも書きましたが、ベットに入っても眠れるわけはありません、故郷の事、体当りの事、死ぬという事、頭は複雑になってしまします、三時出撃であれば、二時には、ベットから起きます。そして、先づ禪(フンドシ)から下着まで、全部新品に着替え、歯を磨き、顔を洗います、これが出撃の時の死出の姿です。昔の武士の切腹の姿です、戦死された隊員の皆が、こうした身も心も清くして戦死されたのであります。

私も七十一歳になりました、名もななく淋しく死んで行く事でしょう、戦死された皆んなのように、名をあげ散った姿を思う時、唯、生き永らえた人生に無意味さを覚えます。

富嶽隊の事につきましては、飯田様のご尽力ただ、ただ頭が下がります。

もし、飯田様が、お力添えなかったら、富嶽隊も名前ばかりになった事でしょう。隊員のお兄様も、お元気で何時までも、永生きして下さい。

貴稿集、本当にありがとうございました。

飯田常三郎様

収 支 計 算 書

特攻隊慰霊顕彰会

(単位 円)

自平成 1 年 4 月 1 日
至平成 1 年 12 月 31 日

科 目	金 額	
収入の部		
1 募集基金収入	186,625	
2 慰霊祭会費収入	0	
3 月例会収入	148,000	
4 受取利息	452,020	
収入の部合計		786,645
支出の部		
1 慰霊祭費用	447,690	
2 他行事費用	118,253	
3 月例会費用	421,107	
4 渉外費	241,487	
5 振替手数料	50	
6 機関紙「特攻」	175,960	
7 事務用品費	16,521	
8 印刷費	18,540	
9 通函費	96,975	
10 会議費	31,990	
11 雑費	1,030	
支出の部合計		1,569,603
当期収支差額		△ 782,958
前期繰越残高		18,567,578
次期繰越残高		17,784,620

註・慰霊祭費用は 1・3・26 に実施した追加分。募集基金収入は知覧石灯笼分。他行事関係費用は遊就館・出版等のもの。

貸 借 対 照 表

特攻隊慰霊顕彰会

平成 1 年 12 月 31 日 (単位 円)

科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	0
現金	267		
普通預金	852,055		
(三菱・市ヶ谷)	(690,980)		
(一勧・四ッ谷)	(9,947)		
(一勧・市ヶ谷)	(143,982)		
(富士・市ヶ谷)	(7,146)		
定期預金	13,987,868	正味財産の部	
(一勧・市ヶ谷)	(3,987,868)	前期繰越残高	18,567,578
(MMC)	(10,000,000)	当期収支差額	△ 782,958
郵便振替	0		
(東京 4-59580)		次期繰越残高	17,784,620
割引債	2,370,000		
(野村証券)			
中期国債	574,430		
(野村証券)			
合 計	17,784,620	合 計	17,784,620

註・奉納模型備品・靖国神社 33,019,570・世田谷観音寺 2,580,000・知覧石灯笼 1,500,000 計 37,109,570

以上のとおり御報告します。
平成 2 年 2 月 19 日 特攻隊慰霊顕彰会 会長 竹田恒徳 理事長 鈴木瞭五郎 局長 最上貞雄
以上決算書を監査して適法正確なることを認めます。
平成 2 年 2 月 19 日 監査 斎藤義雄 須田昭太郎

計 報

陸海軍を通じて生存最後の大将であられた、東久邇宮様が平成 2 年 1 月 20 日午前 8 時 54 分、心不全のため東京広尾の日赤医療センターにて、百二歳の御長寿を全うされ逝去されました。

宮様は昭和 12 年陸軍航空本部長をなされ、戦後も航空同人会の名誉会長として航空のため大変ご尽力を賜はった方で、誠に哀惜に耐えません。

謹んで哀悼の意を表します。
原稿締切の関係で末尾に掲載せざるを得なかったことを深くお詫び申し上げます。

又特攻隊慰霊顕彰会の常任理事として大変ご尽力をいただいていた次の 4 名の方が平成元年に逝去され誠に残念でした。御冥福を心よりお祈り申し上げます。

吉田浩二様 1 月 23 日 (幹候 11 期)
竹村鉦二様 4 月 14 日 (航士 54 期)
中尾周作様 7 月 6 日 (航士 56 期)
佐藤修一様 10 月 28 日 (特操 1 期)

編集後記

本「特攻」も 9 号となりました。次号は 10 号となりますので、各地で行われている特攻慰霊祭の模様や特攻に係のあった方々の肌で触れられた体験談、かくれた逸話等写真がありましたらそれを添えてご投稿いただきたく、特にお願ひ申し上げます。

壮絶の純忠を万古に伝える「特別攻撃隊」も遅くなりましたが 3 月中には発刊されます。是非ご購読下さい。

B5 判 上製本 468 頁
頒布価格 3800 円 送料 500 円 特攻隊慰霊顕彰会事務局にお申し込み下さい。